# かさおか

発行所
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
（0865）
電話 66−1311
FAX 66−1314

元気一杯　あふれる笑顔

（大教会長杯親睦スポーツ大会　5・4茂平グランドにて）

教祖１３０年祭に向かって

三年千日　**さあ！　おたすけ**

**祈る　動く　つなぐ**

立教177年
5月号

四月月次祭講話

# 親神様・教祖にお働きいただける 真実の理作りに励もう

世話人 島村廣義先生

**4月21日、大教会四月祭典にご参拝くだされた世話人・島村廣義先生は、教祖の年祭をつとめる元一日の事情から話しを起こし、「教祖年祭活動、二年目の歩み方」についてお話しくだされた。**

**明治20年、教祖が現身を隠されたときの親神様と初代真柱様との遣り取り、続いて、青年づとめの元祖・高井猶吉先生らのおやしきでのつとめ振りとその意義を詳しく話され、三年千日年祭活動の半ばに差し掛かった私たちの、再確認すべき点について、つぶさにお話しくだされた。講話の要旨は次の通り。**

## ▼つとめの模様立て

教祖は、人間創造のときの母親のお役をつとめられたいんねん・魂を持って、寛政10年4月18日、この世にお生まれになりました。

旬刻限の到来を待ちかねて、親神様は教祖の御身体を貰い受けられ、教祖は月日のやしろと定まられて、この御教えを啓かれました。

教祖は、50年に亘って、口に筆に、そして、御自身が身に行なって親神様の思召を取り次がれました。親神様が、陽気ぐらしを楽しみにこの世・人間を造られたこと、十全の守護をもって守護されていることを諄々と話され、お連れ通りくださいました。

なおも成人を急き込む上から現身を隠され、御存命の理をもって今日も働かれていますが、この教祖の御ひながたは、月日のやしろに定まられた立教の元一日から、御ひながたとして始まります。

この50年のひながたは、親神様が望まれる陽気ぐらし世界実現に向けての親神様のお導き、教祖御自ら身をもって、その範を示され、後々に続く人々が安心して通れるように、お手本を遺されました。

教祖がひながたをもって教えられたことは、たすけ一条の道として教えられたおつとめの理によって、この世を陽気ぐらしの世界に立て替えることだと思います。

教祖は、並々ならぬ御苦労と御苦心をもって、おつとめを教えられました。

先ずは、やしきの掃除から始まって、欲という執着心・ほこりの心を拭い去り、地位・名誉・物事の価値判断など、人間思案では及ぶところではなく、神一条の上から、すべてを綺麗に掃除された上で、一人ひとりのいんねんを見定めて、つとめ人衆を引き寄せ、仕込まれ、道具を調えられるとともに、元なるぢばを定められ、一つひとつ手順を追って、つとめの完成へと導かれました。

## ▼ひながたの集大成

おつとめの勤修をお急き込みくださる最後の総仕上げが、親神様と初代真柱様を芯に当時の先生方と交わされた49日間の御言葉の遣り取りの中に凝縮されていると思います。

真柱様は、第88回青年会総会において、

---

＜実行目標＞人のたすけを願いましょう

**おたすけ・お願いカード 集計：34，564枚**

平成２６年３月２１日～４月２０日

**累計：255，813枚**

明治二十年一月一日より二月十八日、すなわち陰暦正月二十六日までの四十九日間、あたかも立教以来四十九年間のひながたの道を凝縮したかのようなお仕込みをくださった後、命捨ててもとの固い心定めのもと、教えどおりにおつとめをつとめた人々の神一条の精神をお受け取りになって、教祖は現身をお隠しになりました。謂わば、このときのお仕込みは、立教の元一日以来、這えば立て立てば歩めの親心一すじにお導きくださった教祖が、おつとめの実行を台に、我が身思案、人間思案を去って神一条に立ちきる自立を人々にお促しになった、画竜点睛のお仕込みであったと言えましょう。

（あらきとうりょう　249号Ｐ７・８）

と話されています。

陽気ぐらしの世に立て替えるためのおつとめを教えられる、そのためにはあらゆる人間思案を断ちきって神一条でつとめきることが何よりも大事だということです。

立教の元一日の親神様と善兵衛様の三日間に亘る問答と同じように、この49日間の問答の中に、親神様の絶対なる深い親心とお導き、そして、（教祖の御身上と御苦労を思う先生方の心中は如何ばかりだったかと拝察しますが）神様の御言葉に逐一お縋りして一つひとつ尋ねられ、お諭しをいただいています。

神一条の信念を貫き通すこと、神一条につとめきることの大切さを、教祖の身上を台にして厳しく諭される中に、先生方は、だんだんと、親神様のお心に、溶け込んでいかれました。

親神様の仰せと法律との板挟み、神一条と人間思案の板挟みということですが、

さあ〳〵それ〳〵の処、心定めの人衆定め。事情無ければ心が定まらん。胸次第心次第。心の得心出来るまでは尋ねるがよい。降りたと言うたら退かんで。　（明20・1・13）

親神様はどうせこうせの指図はしない、銘々の心次第・胸次第、すでに立教以来すべて教えてきたことだから、自立――自分たちでしっかり思案しておつとめをつとめ、神一条につとめきることを促され、厳しくつとめの実行を促されます。

――

さあ〳〵月日がありてこの世界あり、世界ありてそれ〳〵あり、それ〳〵ありて身の内あり、身の内ありて律あり、律ありても心定めが第一やで。　（明20・1・13）

と、物事の成り立ち・順序を諭され、厳しく迫る教祖の身上を台にして、神一条の決心とつとめの勤修を促される親神様の御心に溶け込んでいかれる初代真柱様・先生方のお心を、私たちは、しっかり、心に納めなければならないと思います。

私たちが、御教えを自分たちの都合のよいように解釈し、自分たちの通りよいように都合のいい通り方をすることを、真柱様は常に戒められていますが、この49日間の様子は、真に人間思案を断ち切り、神一条に、親神様の御心に一つひとつ溶け込んでいかれた初代真柱様・先生方の様子が拝されます。

命捨ててもという者のみつとめに掛かれという決心にまで至り、おつとめをつとめられます。

当時のおつとめの様子を、真柱様は、

その日のおつとめは、形のうえからは決して十分とは申せません。しかし、教祖が満足げにしておられたということは、おつとめを勤める人々の心の真実をお受け取りくださったということだと思うのであります。

（立教175年春季大祭講話）

と話されています。

普段は、夜しかつとめていない、人目を憚って大きな音を出さずにそっとつとめる。それでも、おつとめを中止させられたり、連れて行かれたりと、まともにおつとめをつとめることがなかなかできなかった当時の状況、その中で白昼堂々と、精神を定めて、形の上からは決して十分とは言えませんが、御教え通りにおつとめをつとめられました。

その日の様子は、ぢばを囲む竹の結界が粉々に割れるほど、大勢の人々が詰めかけ参拝をされた。

しかし、警察は来なかった。そして、おつとめも十二下りの終わりまできちんとおつとめいただいています。

## ▼教祖年祭をつとめる意義

おつとめをつとめられた先生方は、さぞかし教祖もお元気になられているだろうと思われたでしょう。ところが、結果は、教祖が現身を隠されるという事情になります。

親神様は、教祖の御身を台にして、世界一れつをたすけるためというよろづたすけのおつとめをつとめることを急き込まれています。先生方が必死になってつとめられたのは、教祖の御身上がたすかっていただきたいというおつとめ、そこに親神様の思召と教祖を思う人々の思案との隔たりが、現身を隠されるという結果をお見せいただくことになったのではと思います。

後刻、お伺いされたおさしづで、現身を隠されても、教祖は御存命で働かれている旨をお諭しいただきます。

教祖は、現身を隠されて、誰憚（はばか）ることなくおつとめをつとめられるようにしてくださった。そして、いずれ「だんくに理が渡そう」と仰るよう、広く一般におさづけの理を渡されるようになりました。

これが、教祖の年祭をつとめる元一日の事情です。

教祖は、こども可愛い上の親心、世界一れつを早くたすけ上げたい一念の親心から現身を隠され、御存命の理をもって働かれています。

この親心にお応えするのが、教祖年祭をつとめる意義です。

## ▼にをいがけ・おたすけが一番の御用

教祖はおたすけを希（こいねが）って初めておぢばに帰ってこられた方々にも、欲を忘れなされや。

なむてんりわうのみこと、と唱えて、手を合わせて神さんをしっかり拝んで廻わるのやで。人を救けたら我が身が救かるのや。

（逸話篇42）

と仰せられ、また、おたすけいただいた方々には、御恩返しの道として、

人を救けに行く事が、一番の御恩返しやから、しっかりおたすけするように。（逸話篇72）

と仰せられて、そして、自分が

救かったことを、人さんに真剣に話さして頂くのやで。（逸話篇100）

と、にをいがけ・おたすけすることを教えられました。

教祖は、身上・事情に徴（しるし）を付けて人を引き寄せられ、初めておぢばへ帰られた方々にも、にをいがけ・おたすけをすることを話され、たすけ一条の御用に使われます。

皆様方は、親・ご先祖様がおたすけいただいて、今日、結構にこの道を通っているという方々、おさづけの理を頂戴したよふぼくだという方々、これが大半だと思います。少しは道の理を聞き分け、たすけ一条の御用の一端を担う立場のお互いです。

よふぼくである私たちに、教祖は、どれだけ、しっかりと立ち働いてやと期待されているかと思わずにはおれません。

世上から見て成程あれでこそと言う心をめんくに持ってすれば、日々に皆んな受け取る。案じる事は一つも無い。速やか鮮やか思うように治まる。思うように成るで。世上から見ては、あれでこそ成程の人や、成程の者やなあという心を持って、神一条の道を運ぶなら、何彼の処鮮やかと守護しよう。（明23・5・6）

よふぼくという立場の上から、「成程」と人様から言ってもらい、親神様からも「一生懸命頑張ってくれているなあ」と思っていただくには、今の旬、教祖130年祭活動の一番大事なこと、にをいがけ・おたすけをすることです。これが、一番、教祖にお喜びいただけることです。

『諭達第三号』に、

心の拠り所を持たず、先の見えない不安を抱える人々に、真実のをやの思いを伝えて世界をたすけることは、この教えを奉じる者の

務めである。

今こそ、道の子お互いは挙って立ち上がり、人々に、心を澄まし、たすけ合う生き方を提示して、世の立て替えに力を尽くすべき時である。

とお諭しいただきます。

## ▼理作りあっての親神様のお働き

にをいがけ・おたすけというと、どちらかと言えば、余り得手ではないという方が多い。しかし、

どんな処にをい掛かるも神が働くから掛かる。なかなかの働き言うまでやない。出るや否や危なき怖わき所でも守護するで通れる。何処其処へにをい掛かりたというは皆神の守護、どんな所通りて危なき所怖わき所でもなかなかの理無くば通られやせん。遁れて来た所、一寸遁れる事出来やせん。仇の中、敵の中剣の中も連れて通るも同じ事と言う。

（明26・7・12）

親神様が働かれているからにをいが掛かる、私たちはおたすけをしているのではなく、親神様が働かれ御守護くださっている、私たちは、そのお手引きをするのです。

さすれば、おたすけの御守護をいただくためには、やはり、親神様にお働きを願うということです。

親神様にお働きを願うには、日々常々のお互いの通り方、よふぼくとして、親神様・教祖にどれだけ誠真実の心をつくしはこんでいるかということが問題です。

危ない事、微かな理で救かるは日々の理という。

（明26・4・29）

という御言葉もあります。

## ▼先人のひながたに学ぶ日々の理づくり

教祖は、明治10年頃から、本席・飯降伊蔵様ご家族に、おやしきへ住み込むように話されていました。教祖の仰ることには、本当に素直に真っ正直に通られている伊蔵様ですが、この仰せを固持され、おやしきに伏せ込まれることになったのは明治15年になってからのことでした。

それまでの間、入り込まなかったのは何故か、それを推測する上でのお話しが遺っています。私の祖父・國次郎が、高井猶吉先生から直接お聞きした話しの中に、当時の中山家の様子や伏せ込まれた先生方の状況を想像させてもらえるお話しが伝えられています。

高井先生がおやしきに入り込まれたのは明治12年、19歳のとき、伊蔵様ご一家が入り込まれる前に青年として中山家に入り込んでおられました。

先生は、当初、半分は家で桶直しの仕事をし、半分はおやしきへ入り込んで御用をつとめられ、翌年13年から、常時、おやしきに入り込まれました。

その当時は、おやしきの日々の食費を納めておやしきに伏せ込まれました。小遣いがある間はおやしきでつとめ、なくなると家に帰って桶直しの仕事をして、食費を作っては、また、おやしきに戻ってつとめました。

それを秀司様が気の毒に思われ、「誠に、高井さん、それでは気の毒や。これからは、儂の食べる分を二人で分け合うて食べようやないか。」と仰せられて、それからは、べったりとおやしきに伏せ込まれました。

秀司様が、自分の食べる分を分けて食べようと言われるくらいの中山家の実情ですから、伊蔵様ご家族5人が中山家にお世話になることは、伊蔵様としては、なかなか出来なかったのではないかと想像されます。

おやしきでのつとめ方ですが、当時、高井先生と宮森先生が青年づとめをされていて、「俺と宮森はんは青年づとめの元祖やで」と、いつも仰っていました。

おやしきへ入り込まれた当時、先ずは、下働き――荷造り・門掃き・使い走り・下駄揃え・餅搗き・肥担ぎ・畑仕事・山仕事――そんな仕事をつとめ上げたら、次は、上の働き――ご飯のお給仕をしたり、座敷の掃除をしたり、雑巾掛けしたり、寝床を敷かせてもらったり――相当な時間、下働きをしてからでなければ出来なかった。

このようなおやしきでの伏せ込み・ご苦労の道中を長い間、通られてから、初めておたすけに行ってこいということになります。

伏せ込みをつとめ上げられておたすけに出られる。親神様にお働きいただく「理作り」をして出られた。だから、おたすけがどんどん上がっていったとお聞かせくださいます。

青年づとめの元祖の高井先生が「儂（わし）らのつとめ方はそういうことだった」と、私の祖父は直接いろいろ話しを聞かされています。

神様にお働きいただく理作りを自分たちがするということについてのお話しです。

## ▼にをいが掛からん、おたすけが上がらんのは

今の私たちに置き換えていろいろ思案すると、教祖130年祭活動は、一にも二にもにをいがけ・おたすけであり、それぞれに働いていますが、なかなかにをいが掛からない、おたすけが上がらないと心を曇らせてしまっていることが、時としてあります。

御守護がないと言うよりも、私たち教会長を始め、おたすけに出るよふぼくお互いが、親神様に働いていただくだけの理作りを、どれだけ、自分がしているかということを思わずにはおれません。

（高知大教会での話しですが）四国も橋が3つ架かり、交通の便も良くなって、今なら、車でなら4時間半ほどでおぢばへ帰らせてもらうことができます。少し前までは、船で1晩掛かっていました。

今は、日帰りが出来るようになりましたが、昔の事を思うと、ちょっとでも長くおぢばに滞在して、親神様・教祖の御膝元でしっかり理作りし、親神様・教祖にお働きいただく真実の伏せ込み・つくし・はこびできるようになりました。

出来るだけ早くおぢばに帰り、ゆっくりとおぢばに滞在し、教会・国々所々に戻る。昔、行き来した、その同じ日数・時間を考えれば、少しでも長くおぢばで滞在して、理作りできると思いますが、現実のところは、全くその反対です。

速く帰れるようになったことをよいことに、祭典ぎりぎりに帰ってくる、祭典が終ったらサッと帰ってしまう、おぢばにちょっとの間しかいない。

願い事・頼み事あるときは、真実の伏せ込み・理作りをして帰る我が身を振り返ってみて、反省することが多いのではないかと思います。

現在は、それぞれ、おぢばへ帰ったときに、おぢばで伏せ込みできるように、おぢばでも、そのひのきしんのいろいろを用意され、その手はずを整えられています。

早朝回廊掃除やおやしきの草引きや、いろいろとひのきしんの内容も様々ですが、特に月次祭・祭典前後は、本当に大勢の方々が、現在、ひのきしんに汗を流しています。きっと、国々でも素晴らしいおたすけの御守護を頂戴されていることと思います。

なかなかにをいが掛からん、おたすけが上がらんのではなく、親神様にお働きいただける理作りをしっかりしなければと思います。

尽した理は将来の理に治まる。どんな大きいものでも、たゞ心だけではどうもならん。道のため尽し果たした理は、難儀不自由という理は無い。

（明31・10・31）

と仰せいただきます。

しっかりと理作りして、親神様にお喜びいただけるようつとめたいと思います。

## ▼常におたすけを心掛け、心に念じる

さて、教祖130年祭の活動の第2年目に入り、『諭達第三号』の思召をよふぼく一人ひとりが実践・実行・行動に移して、教祖にお喜びいただける実を、成果を御守護いただこうと、現在、3月から6月にかけて、その実動をお促しする意味で「ようぼくの集い」が開催されています。

どうぞ、笠岡の理に繋がるよふぼくすべてが、この「ようぼくの集い」を受講され、本当に教祖に「ありがとうございます」とお礼を申しあげて御恩報じの心を定めて、しっかり、その実動に働く、動くということをお互いに心に誓い合いたいと思います。

三年千日の活動も、もう半ばに差し掛かりました。正に三年間の成果を占うに、この中の年の頑張りが、後、３年目に大いに左右いたします。

おたすけは、本当に、どこからでも、その気になれば、自分の身の回りにたくさんあります。「周囲に心を配ることから始まる」と仰せいただきますが、我が心におたすけの心がなかったら、自分の身の回りにいくらおたすけの機会があっても、それに気付くことはできません。

しかし、常におたすけということを心掛け、心に念じておれば、自分の身の回りに、おたすけということはたくさんある、身上・事情に本当に苦しむ人・悩む人が大勢おられます。

自分の出来る事からしっかり実動し、教祖にお喜びいただける成人の姿を御守護いただいて教祖130年祭を迎えたい。このことを、お互いにしっかり申し合わせ誓い合って２年目の活動をつとめ上げたいと思います。

《以上要約》

支部長ご挨拶

熱心に練り合う

# 育つ、育てる努力を

## 詰所で「支部の集い」行う

**第96回 婦人会総会**

四月十九日本部中庭に於いて婦人会第九十六回総会が開催され、国の内外から四万六千人の会員が参集。真柱様のお言葉・婦人会長様のお話を聞かせて頂いた。

午後からは記念行事として笠岡詰所講堂にて二百六十一名が参加し、「支部の集い」を行った。今年は、まずジャンケンゲームや肩たたきゲーム等で、集まったお互いの心を和らげて貰い、その後、総会での真柱様のお言葉、中山はるえ婦人会長様のお話を各自でふりかえり、手渡された「ふりかえりシート」に記入して頂いた。それを元に四名のグループに分かれ、それぞれ感じた事、心に残った言葉などを班内で共有し練り合った後に、六名の代表者が全体で発表し、教祖にそれぞれがお誓いを書いた。

その後、上原きよ㋮笠岡支部長様より「信仰の喜びを素直に次代に伝える事が婦人会員の役割、心の使い方の勉強。喜び難い事を喜べるお互いで在りたい。親神様・教祖にお喜び頂く為に、人の助かりを願わせて頂く日々が大切で、まず私達から育つ、育てる努力をさせて頂きましょう」とご挨拶を頂戴した。

最後に「航海」を全員で合唱し、教祖百三十年祭に向かうこの旬に、婦人会員として更なる実働を進めて行くことを誓い合いました。

**婦人会活動方針**

全婦人会委員は　ご恩報じの道を邁進しよう

一、教えを実践して実のようぼくに育つ

一、身近な人を実のようぼくに育てる

（婦人会常任委員　山　野　な　つ）

## 「お帰り講話」開催

4・18 詰所　布教部

布教部（田中隆之部長）では4月18日、午後7時から約1時間、詰所3階講堂で講師に榮嶋憲和先生（櫻井大教会部属・三輪分教会前会長）を迎え「お帰り講話」を開催、宿泊者など約190人が参集した。

先生は、お道を信じ、親々の思いに素直に通ればいろんなご守護を頂く事が出来る。また、かしもの・かりものの理を確認する体験談などを話された。

ユーモアを交えた講演に、会場は終始笑いの絶えない「お帰り講話」だった。

## 新入生歓迎会 開催

4・27 詰所　学担

5月4日付の天理時報を手にした途端、1面に掲載された写真に眼を奪われた。4月25日に本部第2食堂で「教祖130年祭おたすけ推進大会」が開催され、真剣に聞き入る約1600人の参加者の中に大教会布教部・田中部長と学生担当委員会・山野委員長の二人が輝くように写っていたからだった。

この大会の2日後である4月27日、笠岡学生担当委員会（山野弘実委員長）は、詰所で、親里管内の学校に通う高校生、専門学校生、大学生を対象にした新入生歓迎会を開催、学生15名が参加した。

眩しい初夏のような日差しがあふれる当日の朝、笠岡詰所に集合した学生達はマイクロバスで大和郡山市へと向かった。現地では、大学生スタッフによっていくつかのグループに分けられ、歓声を上げながら和気藹々（あいあい）とボーリングを楽しんだ。

心地よい汗を流し詰所に帰った参加者達に対して、前述の大会において「道の牽引役」としての決意を新たにした山野委員長は、ご多忙のため参加されなかった大教会長様に代わり「歓迎会を開催して下さった大教会長様の親心に添わせていただくためにも、この会を通して親睦を深め、笠岡につながる学生としてお互いに助け合って、充実した学生生活を送っていただきたい」と挨拶した。

その後、学生達は輪になってにぎやかに自己紹介をし、お互いの距離が一層縮まったように感じられた。中庭では学生担当委員によってバーベキューが用意され、香ばしい匂いがペコペコになったお腹を刺激した。どのテーブルも和やかな雰囲気に包まれ、おぢばの学校に通う学生同士が親睦を深めた一日だった。

尚、平成26年4月現在、親里管内の学校に在籍する笠岡所属の学生数は31人。当日の参加者の内訳は、高校・大学の新入生各4人ずつ、在学生7人、学生担当委員7人の合計22人でした。

（学生担当委員　香取雅人）

親里ぢばで学ぶ学生達

# 晴天の下、はつらつとプレー

## 第8回 大教会長杯親睦スポーツ大会

５月４日、８回目を迎える大教会長杯親睦スポーツ大会が茂平グランドで開催され、145名（ひのきしん者含）が参加した。毎回天候に悩まされてきた同大会。８回目にして念願の晴天のご守護をいただいた。

今回は全ブロックから参加者があり、計６チームが、２つのリーグに分かれて、ソフトボールを行った。どの試合も年代や性別を感じさせない、好プレーやハッスルプレーが見られ、大いに盛り上がった。

昼食は、婦人会によるカレーライスが振る舞われ、みな試合で空いたお腹を満たし、午後からの英気を養った。

午後からの最終順位決定戦が行われ、優勝戦では打線が爆発した福山チームが、見事優勝を飾った。

参加者らは、同じ笠岡につながる教友同士の親睦を深め、熱く和やかな一日を過ごした。尚、主な順位は以下の通り。

優勝：福山、準優勝：直轄Ｂ、３位：直轄Ｃ、大教会長賞：直轄Ａ。

五月晴れの下、気迫あふれるプレー続出
（決勝　福山 ── 直轄Ｂ）

試合中上空に現れた珍しい虹

**「環水平アーク」**

大教会長杯親睦スポーツ大会が開催された５月４日、関東から中国・四国地方で、横一文字になった珍しい虹が観測された。

環水平アークと呼ばれ、大気中の氷粒に、太陽光が屈折し、ほぼ水平な虹が見える光学現象である。虹などと同じ大気光象の一種で、水平弧、水平環 とも呼ばれる。日本国内では年に数十回観測される。

上空の氷の結晶の方向がほぼそろったときに、この結晶で屈折した太陽光により見える現象で、一般の虹が太陽とは反対の方向に見えるのに対し、環水平アークは太陽と同じ方向に、ほぼ水平に現れる。ただし、低空に雲があると見えない。

# 立教百七十七年 四月月次祭 祭典役割表

| 祭主 | 大教会長様 |
|---|---|
| 扈者 | 門脇元教 |
| | 上原志郎 |

| 講話 | 世話人先生 |
|---|---|

| 賛者 | 上原浩 |
|---|---|
| | 虫明立生 |
| 指図方 | 上原繁道 |

| 六月講話 | 学生層育成者講習会 |
|---|---|

| 役割＼区分 | 坐り勤 | 前半 | 後半 |
|---|---|---|---|
| 地方 | 吉岡壽 | 佐藤道孝 | 中村邦義 |
| | 岡﨑真一 | 今川昌彦 | 上原志郎 |
| | 吉岡誠一郎 | 岡﨑輝彦 | 内海史郎 |
| おつとめをどり | 大教会長様 | 中村剛 | 岡本久善 |
| | 岡本久善 | 中島誠治 | 門脇元教 |
| | 上原繁道 | 三島渉 | 杉原博之 |
| | 大教会奥様 | 武内正美 | 上原順子 |
| | 田中ますみ | 森本冨美子 | 高木孝子 |
| | 門脇郁子 | 谷内美知子 | 中村初美 |
| 笛 | 山野弘実 | 浅野明教 | 武内清明 |
| ちゃんぽん | 森本忠平 | 上原浩 | 渡邉隆夫 |
| 拍子木 | 森本忠善 | 横山逸郎 | 虫明立生 |
| 太鼓 | 笹尾正治 | 高木昭祥 | 田林久嗣 |
| すりがね | 谷内伸自 | 中村道徳 | 佐藤真孝 |
| 小鼓 | 田中隆之 | 森本忠善 | 赤木素志 |
| 琴 | 虫明好美 | 内海安子 | 岡﨑豊子 |
| 三味線 | 今川佐智子 | 門脇加津 | 笹尾一美 |
| 胡弓 | 佐藤香苗 | 三島照美 | 横山小智榮 |

## こころの詩

笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されていましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

▼天理教道友社発行『天理時報』より転載

▽4月20日付「時報歌壇」

・海松ヶ岡分教会　藤井光子さん

蒸す米の湯気もうもうと味噌作り

動く人みな湯気のなかなり

・芦品分教会　金谷眞佐代さん

早早と還暦になり年金の

手続きをする楽しみ増えたり

・海松ヶ岡分教会　池田広子さん

庭草を引くかたわらに春蘭の

蕾いくつも首もたげおり

▽4月27日付「時報俳壇」

・海松ヶ岡分教会　藤井光子さん

夜桜や口にふくみし金平糖

・海松ヶ岡分教会　池田広子さん

亡き父の植えし桜の五分咲きに

▼養徳社発行『陽気』誌五月号、「道柳」より転載。今回の課題は「勇」。

▽準秀詠

・東悠分教会前会長夫人　田林美智子さん

緑風に心も勇むひのきしん

▼表紙写真

（吉岡輝昭かさおか編集部員）

# 四月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に 会長上原理一 慎んで申し上げます
親神様には人間が陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたいとの思召により この世と人間世界をお創造（はじめ）になられたばかりでなく 約束の年限の到来と共にいざなみの命様の魂のいんねんある教祖を月日のやしろとお定めになり 陽気ぐらしへのひながたをお示し下さり 世界たすけのこの道をお付け下さいました 更には教祖はお姿を隠されただけで今尚たすけ一条の先頭に立ち 陽気ぐらし実現へとお導き下さっております事は誠に有難く勿体ない極みでございます 私共はその御恩に報いるべく日々は朝に夕にと御礼申し上げつつたすけ一条の御用の上に勤め励ませて頂いております その上から先日十八日の教祖御誕生祭や翌十九日の婦人会総会に当たり誘い合わせておぢば帰りさせて頂き 教祖に二百十六回目の御誕生日の御祝いを申し上げると共に 教祖百三十年祭に向け道の台としての成人をお誓い申し上げさせて頂きました
その中にも今日の吉日はこれの笠岡にお許し下さいました月に一度の御祭日でございますので 只今からおつとめ奉仕人一同 喜び感謝とたすけ心一杯に明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて 四月の月次祭を執り行わせて頂きます 御前には今日の日を楽しみに寄り集い日頃の御高恩に改めてお礼申し上げ 御恩報じの思いのままに三万四千五百六十四枚のおたすけお願いカードに日々のたすけ心を込めて 尚も変わらぬ親心にお縋りする状を御覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます
さて本日は世話人島村廣義先生にお越し頂いておりますので 後程御講話を頂戴致します お聞かせ頂く一つ一つをしっかりと受け止め二年目の年祭活動の糧とさせて頂く所存でございます 又二十九日の全教一斉ひのきしんデーやようぼくの集いにも誘い合わせて参加させて頂きます
更には又 来月は直轄巡教をさせて頂き 夫々の教会での年祭活動二年目の成人の歩みを確認すると共に実動の後押しをさせて頂き 二十五日の別席ひのきしん団参を通して一手一つの心をより強いものにして 成人の歩みを早めて行く所存でございます
何卒親神様には 「世界一列をたすけたい」との親心を我が心として 我身思案を捨てたすけ一条に邁進する皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして 願う心の誠の理に自由の御守護を賜り 親神様を真実の親と慕い一列兄弟の理に目覚める人が弥増して 皆が助け合い共に喜びを分かち合う陽気づくめの世の状に一日も早くお導き下さいますよう 一同と共に慎んでお願い申し上げます

## 大教会だより

### ＝辞令＝

立教175年4月21日付

**◎登用**

幹部承事　上原澄雄
承事　中村道徳
准承事　上原繁次

**◎教人資格講習会（中期）修了者**

立教175年5月6日終講

國須原田良平
國須原田恵理

**◎直属ひのきしん特別隊**

自　立教177年4月11日　東城横山逸郎
至　立教177年4月13日
自　立教177年4月14日　久松中村剛史
至　立教177年4月16日
自　立教177年4月17日　神邉小坂静宏
至　立教177年4月20日

## ◎教祖誕生祭詰所受け入れひのきしん

自 立教177年4月17日
至 立教177年4月20日

福勇　福島恒彦
高丸　谷本圭子
西伯　本多孝二
甲井　山田敏教
油木　中村邦義
福芦　藤原徳美
福芦　藤原鈴江
瑞雲　豊田俊美
甲井　山田信子

## ◎本部食堂ひのきしん

自 立教177年5月1日
至 立教177年5月15日

高丸　谷本圭子

## ◎立教177年定期巡教

福山　大教会長様
高屋　上原繁道
神邉　大教会長様
島根　大教会奥様
久松　上原繁道
鶴山　大教会奥様
弥高山　中村邦義
陽備　大教会長様
摩耶　大教会長様
金浦　大教会奥様（6月）
興明　上原繁道
ひろさと　佐藤道孝
陶山　上原澄雄
芳井　上原繁道
呉照　大教会奥様
海松ヶ岡　吉岡壽
東悠　中村剛
吸江　吉岡壽
照陽　大教会長様
輝美濃　中村剛
新山邑　佐藤道孝
呰部　上原繁道
明石市　中村剛
上下　吉岡壽
府中市　佐藤道孝
東城　中村剛
服部　吉岡壽
島中　上原繁道
驛家　大教会奥様
油木　佐藤道孝
葦陽　中村邦義
湯田原　大教会長様
備中　佐藤道孝
神昭　大教会奥様
美之郷　大教会長様
錦備　上原繁道
笠晴　中村邦義

年祭活動の中の年に、「ようぼくの集い」が開催されて、何処其処で賑やかであります。つい先日のこと、神殿講話で大教会奥様が、幼少の頃に御両親から教わった「ぢば甘露台」の思い出を、うるわしく話されて、子供心に感じた御教えを、まるでご自分のお子様に話し伝えるが如くにお話し下さいました。甘露台のかぐらづとめがあるから、「おさづけの理」が働くのです、その理が有るから国々所々の教会のおつとめが出来、おたすけが出来るのです。それが出来なかった往時の人達は、教祖にのみ助けて頂かれたのです。

人間創造の目的である世界の陽気ぐらしのその日を願い、一日も早く人間が助かることを願い、七十二億人に伝え広めるのが道の先達である用木の使命だから、先ずは願った昨年！ 続いて願い・動く今年の後半に向けて更なる躍進を！「おさづけの取次」で邁進するのです。

そこに、先回りして下さる教祖のお働きを受けるには、日頃のおつとめを通して受ける、その理しか無いのであります。と続きます。

あたかも教祖に諭されているような錯覚に陥るのは私だけは無いようです。「ぐいぐいとお話が入ってくるのです。」と云った仲間の言葉。

最近の私は支部の御用やら、自治会や友人とのお付き合いにかまけて、自教会の事がおろそかになりがちでしたが、お話が終りになるころには、反省と後悔の念で、これは今日からやり直しだわ・・・。

先月、本部「おたすけ推進大会」に参加する機会があり、「ようぼくの集いは、本部の為やら教区の為ではなくて、各々の教会の活性化、疎遠になった用木を目覚めさせて教会への繋がりを深める為に行っている」のだから、懸命に参加を促すのが勤めである。とお聞かせ頂いた。そこなのです、笠岡大教会長様が年祭前に「今より一人以上のおつとめ奉仕者を御守護頂いて下さい」と教えて頂いた事に繋がるのです。もう一度始めから仕切り直さなければならない私ですが、大教会奥様のお話で、自分が目覚めた今の心で、後半を努めて行こうと思っています。（に）